

との理由で、全て削除となった。そこで、堀内家文書によって解明できた諸点を中心としながらも、東北諸藩に伝播した蘭学・蘭方医学も収載して、急遽『伝播する蘭学——江戸・長崎から東北へ——』（勉誠出版）をまとめて、『米沢藩医 堀内家文書』（2015年3月27日刊）の4日後の2015年3月31日付で公刊、各位に対する謝辞を表明することができた次第。意のあるところを汲んで

いただき、せいぜいご活用いただけたら著者の喜びこれに過ぎるものはない。

附記2

『日本歴史』第818号（2016年7月号）に次の書評が掲載されている。矢森小映子「片桐一男著『伝播する蘭学——江戸・長崎から東北へ——』

（平成28年4月例会）

書 評

米田該典 著

『正倉院の香薬——材質調査から保存へ——』

東大寺の正倉院は奈良時代を中心とした多数の宝物が所蔵されていることで広く知られている。そのなかには当時の薬物も含まれており、かねてより、薬学の研究者を中心に注目されるところである。漢方の研究においては、古来どのような処方方が運用されてきたかを文献的に探究することは重要であるが、その際には漢方処方を構成する生薬がその当時は果たして如何なるものであったのかという問題に直面せざるを得ない。本草書を見ても現代流通している生薬とは明らかに性状の異なる記載があり、漢方処方方の運用の軌跡を現代に生かすには、当時用いられていた生薬を明らかにすることが肝要である。故に、正倉院に保存され長い年月を刻んできた薬物は、じかに生薬の利用状況を伝える貴重な資料なのである。

正倉院薬物の本格的な理化学調査は1948年の第1次調査と1994年の第2次調査があるが、本書は第2次調査に携わった著者が第1次調査と第2次調査で行われた理化学的調査についてはもちろん、文献的な考証や薬物以外の宝物に関する内容まで網羅しており、正倉院薬物の今日までの調査の詳細を伝える好著である。

本書の表題は、正倉院で行われた宝物の点検、調査を記録した「曝涼帳」にある記載に基づき「薬物」ではなく「香薬」の語を用いている。第

1章では「香薬とその調査」として正倉院宝物の概要、および「種々薬帳」、「曝涼帳」などから香薬の出入と管理について触れ、第1次、第2次調査の概要を述べられている。

第2章は「香と香材の調査」として沈香、全浅香と黄熟香、白檀、木香、丁香、薰陸、琥碧、合香、練り香といった香薬について具体的な調査内容を個別に述べている。個々の生薬に含まれる化学成分についての調査はもちろん、経年的な成分変化についても検証されている。また、香薬を利用するための香道具についても報告されている。

第3章では「薬物の調査」として麝香、犀角器、阿麻勒、奄麻羅、無食子、厚朴、桂心、人參、大黃、臍蜜、甘草、胡同律、没食子之属、草根木実数種、葉塵、防葵と狼毒、獸胆などについての調査内容が報告されている。ここでは理化学的調査の進歩により、第1次調査では得ることができなかった調査内容や、海外での豊富な生薬標本の収集とそれらとの比較により正倉院の薬物について検証されている。第2章、第3章には著者の長年の研究成果が反映されており、第1次調査を覆す調査内容も随所にみられ、本書の真骨頂といえよう。

第4章の前の附章では「ある蘭方医の薬箱に見る保存例」として緒方洪庵の薬箱、および収載薬物について述べられている。個々の薬物として

は、撰綿(セメン)、將軍(大黃)、甘草、桂枝、旃那(センナ)、苘根などの生薬についての調査や、幕末の売薬であるウルユスについての分析結果などが報告されている。

第4章では「宝物を彩るもの 一織布・紙に見る」として蘇芳、紫鑛、茜根、紫根、銀泥、丹、朱・辰砂、雄黄、密陀僧などの染色材、および包装材料についての調査、報告がなされている。

第5章では「香薬の材質調査から保存へ」として正倉院の構造や膏薬の収納と包装について触れられており、正倉院の宝物、香薬について文化財の保存という観点から提言されている。本書の副

題にも「材質調査から保存へ」とあるように、文化財の保存の重要性が諸所で訴えられている。ここには、第1次調査やその他の調査資料、文献を精微に検証したうえで、第2次調査に実際に携わった著者ならではの視点があるといえよう。正倉院の宝物、香薬とともに、本書に残された調査内容も後代に受け継がれてしかるべきであろう。

(鈴木 達彦)

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町355、
TEL. 075 (751) 1781、2015年10月、A5判、
440頁、10,000円+税]

島田保久 編著

『蝦夷地醫家人名字彙』

本書は北海道医史学研究会代表幹事の著者が明治期以前の蝦夷地といわれた時代の医家について、40数年にわたり道内外の史料を調査、研究した集大成である。

まず例言では利用に当たっての基本事項について解説している。蝦夷地とは和人地(道南の地域)と蝦夷地(狭義)を含む広義の地域を指し、さらに狭義の蝦夷地を東蝦夷地(太平洋岸の和人地から知床半島までの地域とクナシリ、エトロフなど)と西蝦夷地(日本海岸の和人地からソウヤを経てオホーツク海沿岸と知床半島突端までの地域)、文化6年(1809)幕府令により樺太を北蝦夷地と称し、蝦夷地を3区分した。地名は文化4年(1807)幕府令により蝦夷地を仮名または片仮名で呼称するとあり、本書では蝦夷地は片仮名、和人地は漢字で表記している。

蝦夷地の医家とは明治元年(1868)以前に蝦夷地に居住または渡来し足跡を残した医師の総称としている。収集した医家は530人にのぼり、個々の経歴について記述している。そのなかで松前藩医、町医、箱館奉行所の在任医師、御雇医師、立入医師、東北6藩から蝦夷地に派遣された陣屋詰医師、幕府の巡見使、採薬使に同行した付添医師、

アイヌに強制種痘をした種痘医に区分している。オホーツク海沿岸、クナシリ、エトロフ、北蝦夷地など北辺の地に越冬した藩兵、医師のなかに水腫病などによって死者がでていた。530人の医師の修学先は多くは渡海し東北、関東、関西地方と広域にわたっている。一部をみると、斎藤養達(津軽藩医)、伊東玄朴・貫斎、吉益東洞・南涯・北洲、緒方洪庵、坪井信道、荻野元凱、佐藤舜海・林洞海、吉田長淑、竹内玄同、多紀元簡、華岡青洲、山脇東洋・東海、香川修徳で昌平黌にも修学している。地元の箱館では深瀬洋春、田澤春堂、栗本匏庵のもとで教えをうけている。特記すべきことは箱館が開港されるとロシア病院の医師アルブレヒトのもとに下山仙庵、田澤春堂、深瀬洋春、永井玄榮など、後任の医師ザレンスキーのもとに深瀬洋春、永井玄榮、下山仙庵、高橋元斎、瀧野衝雲などが研修医となって就学している。修学先は時代とともに漢方医学から西洋医学に移っているようである。

巻末の主要参考文献は660、各種御用留などの文書は省略している。

北海道大学アイヌ・先住民研究センターの佐々木利和特任教授と北海道大学大学院文学研究科日